

いはらき歴史通信

第99号

2021(令和3).6.1

昔の新聞記事から歴史を探る

昔のことを調べる際にどんな資料が利用できるのでしょうか。多くの方はミミズのような文字で書かれた古文書や、地中から発掘された土器や石器などを思い描くかもしれません。しかし、江戸時代以降の、明治から昭和のことを調べる際には、新聞記事も重要な手掛かりになるのです。

日本では、明治時代に入ると、西洋諸国の影響を受けて多くの新聞が発行されるようになります。茨城県内でも様々な新聞が発行されました。その中で、「不偏不党、公明正大な民衆の新聞」を目指して明治二十四年（一八九一）七月五日に発刊されたのが「いはらき」新聞（現在の茨城新聞）です。「いはらき」新聞は、その名の通り、茨城県民を主な読者として想定しており、大子町を含む県内の動向を中心に様々なニュースを取り上げています。

「いはらき」新聞には、政治経済の動向から日常的な話題まで、多岐にわたる記事が収録されており、明治以降の大子町の歴史を明らかにする上で貴重な記録となっています。そのため、大子町の歴史をまとめた『大子町史』を編さんする際にも、「いはらき」新聞の記事が多数引用されています。同新聞の記事をより活用しやすい形にしようと考えた当時の大子町史編さん委員会は、記事

の表題をまとめた『大子町関係「いはらき」新聞記事表題索引目録』（以下、『表題索引目録』と略）を編集しました。現在までで、「いはらき」新聞が創刊された明治二十四年から大正十二年（一九二三）までの記事をまとめた（一）、同十三年から昭和十二年（一九三七）までを収録した（二）が刊行されています。しかし、『大子町史』の編さんが一段落した後、昭和十三年以降の続巻は編集されないうままでした。

そこで、大子町歴史資料調査研究会では、大子町史編さん委員会の事業を引き継ぐ形で、『表題索引目録』の続巻の編集を始めています。現時点で収録を予定しているのは、昭和十三年から同二十年までの八年間です。

この期間は、ちょうど日中戦争が本格化し、アメリカとの開戦、そして終戦を迎えるまでのアジア・太平洋戦争（当時の言葉で「大東亜戦争」）の時代と重なります。この時期は、戦争によって経済や生活の統制が強まっており、生活物資の配給や国のために献金をした人の表彰などの記事が多く見られます。また、大子町域が木炭製造や馬産の盛んな地域であったため、それらの増産の様子がよく取り上げられています。当時国策として推進されていた満洲移民に、大子町が積極的に乗り出したのも昭和十四年です。本期間の『表題索引目録』が完成することで、戦時中に起こった大子町域内の出来事についての研究も進むと思われれます。

昭和年間の大子町関係の新聞記事は膨大で、『表題索引目録』の編集にはしばらく時間がかかりそうです。しかし、何らかの形で皆さんに成果を紹介できるように、鋭意編集を進めてまいります。

また、明治二十四年から、合併によって新生大子町が誕生する昭和三十年までの大子町関連新聞記事については、町立中央公民館内の歴史資料室で保管しています。ご興味のある方は、すでに刊行されている『表題索引目録』（一）（二）とともにご利用ください。

（藤井達也）

和田坂の名馬「宮口」の墓と桜

飯村尋道

町付から中郷街道に入り半道ほど北上すると、急な下り坂がある。地名から和田坂（通称ユバヤの坂）といい、その右手道端の塚上に一本の桜の巨木と石塔が建っている。

石塔は、天保の初め、水戸藩の里子馬制度により、水戸烈公（九代藩主徳川斉昭）から中郷村に預けられた牝馬の「宮口」の墓碑である。正面に「宮口 墓」、左右に「安政三年辰二月四日 益子藤次エ門 高信友衛門」とある。

里子馬制度とは、水戸藩が郡奉行を通じて牝仔馬一疋を里子として農民に預け、その馬から産まれた仔馬三疋を藩に納めれば、預かった母馬は農民に与えるという制度である。

水戸烈公は天下に魁けた天保の改革で、農村復興のため母馬となる牝仔馬を南部・三春・会津地方から購入し、中郷村の高信友衛門にアラビア種の牝仔馬を預け渡した。一方で、庄屋の益子藤次エ門に里子馬掛を命じ、里親となった農家への飼育や種付け等の指導に当たらせて産馬を奨励した。

牝馬は役目を果たして安政三年（一八五六）二月四日に斃れ、里親の友衛門や庄屋の藤次エ門ら村人の手によって墓碑が建てられた。益子家には「桜は四代前の藤次エ門が植えた」と伝えられていて、この時に墓標として植えたのではないか。

宮口に限らず馬は一家の働き手として大事にされ、母屋の中に厩があり家族と共に生活し、斃れると集落のウマステバに懇ろに葬られた。馬が「半身上」と言われる所以である。

馬の供養には桜が似合う。馬頭観音塔を建てれば桜を植えた。馬の祭日は旧三月十五日前後が多く、それは桜の開花と重なり、また苗代や種蒔き等、農事の始まる時季でもある。

この和田坂の桜（エドヒガン）の開花も、村人の「宮口」への感謝と、春の訪れを告げる農事の目安となったのではないか。

高柴村（生瀬）では天保八年（一八三七）三月、庄屋と与頭の連名で「御郡奉行所様」宛に預かった牝馬の返納願を出している。何故、馬を藩に返したのか、その理由は「御預かり女馬の義、病のうえ交合これ無く、種付けのみぎり御手術を御尽し下し置かれ候得共、交合の義これ無く難義仕り申し候、この先々、身籠りの見込み無く、恐れ入り奉る御願には御座候得共、御馬御返納仕りたく存じ奉り候」（筆者、原文簡略）とある。病気から御産不能の牝馬もいたようだ。中郷村や高柴村に限らず、外の村々でも里子馬を藩から預かり産馬に努めたのではないか。（常陸大宮市在住）



和田坂の桜と「宮口」の墓

大子町・鎮守の杜(一一)

根渡神社(大子町大沢四〇六)

高根信和

JR水郡線上小川駅から北上し郵便局前の丁字路を左折、上小川小学校前を経由して久慈川にかかる橋を渡る。県道三二二号(大子美和線)を大沢川に沿って走ること約五キロメートル、茨城交通岡平バス停留所から数百メートル、県道側に根渡神社の社号標が建っている。

柱が垂直で笠木も貫も円柱の神明鳥居をくぐり、三〇段の石段を登ると境内に着く。参道両側にユーモラスな顔をした狛犬が一对、その左手に舟生村石工三次□□作の手水石の水盤、その奥に「神徳昂宣之誌」の石の記念碑が建立されている。逆光でよく解読できないが、社の創建の由来、胎内潜石、二王石などの十景奇岩の霊が境内に所在すること、社名の由来等が刻まれている。拝殿左奥手に大石があり、赤い衣を身に着けた三体の石像がその大石の陰に鎮座し、胎内くぐりが行われた跡と推察できる。

拝殿は間口三間、奥行二間の六坪、屋根に左巻き三つ巴の神紋が見える。本殿は、拝殿から二十数段の石段を登ると南向き方一間、覆屋がかけられている。本殿の真後ろに高さ約一〇メートルの巨岩がある。頂部には八方に古木の根が張り、社の名の由来にふさわしい。現在は枯れている。かつては、この巨岩が社の御神体として崇拝されていたと思われる。付近には大小の石が点在し、その間に杉の巨木が森を形成して深山そのものである。右手下には谷川が流れ、大沢川に合流している。

祭神は大己貴命(おこなむちのみこと)。社伝によると、大永五年(一五二五)創建と伝えられている。末社として鹿島・稲荷・金刀比羅・天照大神宮・辰野・三度・静・富士・秋葉・愛宕・熊野・

天満宮・三島神社がある。例祭は、春と秋である。

祭神大己貴命は、縁結びの神、出雲大社の祭神でもあるが、同じく産業守護神として広く崇敬者の多い大洗町の大洗磯前神社が知られている。町内には、真弓神社(浅川)、八溝嶺神社(上野宮)、中山神社(中郷)、依上神社(塙)、越方神社(相川)、金砂神社(槇野地)、稲荷神社(下津原)の七社がある。大己貴命は大国主命(おおくにぬしのみこと)と同神で、一般に「大国さま」と呼ばれて親しまれており、縁結び、福の神として深い信仰を集めている。また当地では、農業、林業の神として、地域の氏神様としての信仰が厚い神社である。(水戸市在住)



根渡神社の石段と拝殿



根渡神社の拝殿

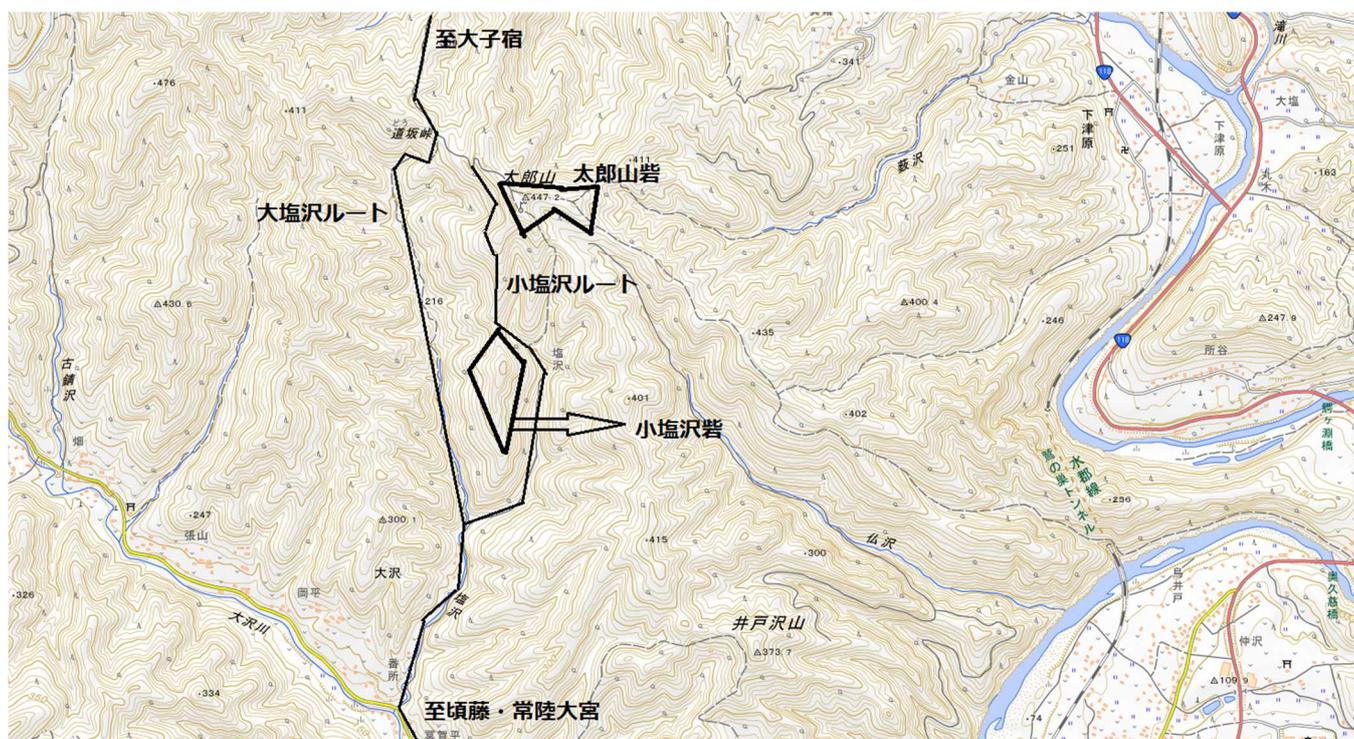
依上道（南郷道）沿いの新規城館遺構について

五十嵐雄大

大子町域を南北に貫く道は、江戸時代に南郷道、中世に依上道と呼ばれ、今では国道一一八号線がその役割を引き継いでいます。この道は、「神皇正統記」を記した南北朝時代の北畠親房が栃木県域を通過する奥大道、茨城県の海側を通過する東海道と共に奥州とつながる道であると認識するほど重要な道でした。大子町域を含む依上道沿いには、多数の城館遺跡が確認されています。この道は、城内を通過していることが多く、城館がその道を構成要素として取り込んだものと考えています。今年の春に南郷道最大の難所といわれた道坂峠に新規城館跡を確認しました。

一つは太郎山山頂にある遺構です。今では遺構の中心部に航空アンテナ施設が建っていて地形が改変されていますが、東の尾根に幅三メートルの岩盤堀切を確認しました。太郎山からは下野宮・月居山・大沢方面などを見ることができ、狼煙台の役割があったものと推定されます。もう一つは、太郎山から南に五百メートル下った尾根沿いにある遺構です。ここには、神社跡の周囲に土塁が四方にめぐらされ、南側には切岸と幅七メートル深さ五メートルの堀切が東西三〇メートルにわたって残っています。かつて近辺に塩沢金山があったため、それに関連する城郭遺構かもしれないと推定されます。この二つの城館遺跡は依上道を押さえる所に位置しています。関所として機能していたのではないかと考えています。常陸大宮市では、南郷道の三地点が歴史の道百選に登録されました。しかし、大子町内にも古道がよく残っている所があります。ぜひ足を運び、往時の様子を感じていただけると幸いです。

（茨城城郭研究会）



道坂峠沿いの中世城館

（常陸大宮市歴史民俗資料館編『南郷道』（2014）を基に国土地理院地図から作成）

水郡線の全線運転再開に寄せて

大金 祐介

昭和九年（一九三四）十二月四日、水郡線は、最後の未開通区間であった磐城棚倉〜川東間が開通し、全線で運転を開始した。

初めに、午前五時に磐城棚倉駅を出発した列車が磐城棚倉〜川東間を処女運転し、午前六時五九分に郡山駅に到着した。次いで、午前五時一五分に郡山駅を出発した列車と午前五時五〇分に水戸駅を出発した列車が水郡線の全線を初めて走破した。全線開通を心待ちにしていた沿線住民は、歓喜に沸き、列車を熱烈に歓迎した。「いはらき」新聞は、当時の様子を次のように伝えている。「何の列車も何の列車も木材、薪炭、□等の初荷を満載した貨車を増結して車両の響きも高らかに行進し、沿線各駅とも万国旗をはりめぐらし飾りもの余興、煙火等で迎へ、はちきれんばかりの喜びに溢れ多数の小学児童、村民等は日章旗を打ふつて万歳を叫んだ」（昭和九年十二月五日付第五面）。沿線住民にとって、水郡線の全線開通は、明治四十年に誘致運動を開始して以来、実に二七年を経て大願が成就した瞬間であった。

午前六時一五分、二等客車五両編成の交歓臨時列車が水戸駅を出発した。これは、郡山市で開催される水郡線全線開通祝賀会の出席者を乗せるための臨時列車であった。水戸駅では、阿部嘉七茨城県知事、中崎俊秀水戸市長らに乗せ、各駅では、沿線町村の町村長らに乗せ、午前一時、郡山駅に到着した。郡山市では、交歓臨時列車の到着後、正午から麓山公園において、鉄道省東京建設事務所、同省東京鉄道局、同省仙台鉄道局の主催により、水郡線全線開通祝賀会が盛大に開催された。内田信也鉄道大臣などの鉄道省関係者、阿部茨城県知事、中崎水戸市長、伊藤武彦福島県知事、和田潤郡山市長などの沿線自治体関係者、工事関係者な

ど、総勢二千七百余名が出席した。中崎水戸市長と和田郡山市長は、水戸郡山両市が水郡線で結ばれたことを祝して固く握手を交わした。

一方、水戸〜郡山間の要衝と位置付けられた常陸大子駅には、全線開通に合わせて、機関庫等

の施設が新たに設置された。このため大子町では、全線開通の翌日、十二月五日の午前一〇時三〇分から、常陸大子駅前広場において、町の主催により、水郡線全線開通と機関庫竣工を祝う式典と宴会が開催され、内田鉄道相などの鉄道省関係者、保内郷の町村長、町村会議員、官公署長、有志者などが出席した。「いはらき」新聞は、この日の賑わいを次のように伝えている。「大子町内各戸は国旗を掲げ花火を打ちあげて祝意を表し、駅前広場に余興のレビニュー等もあり非常な賑ひを呈した」（昭和九年十二月六日付第二面）。

水郡線は、令和元年台風一九号水害により第六久慈川橋梁の流失という甚大な被害を受けたが、これ乗り越えて、三年三月二十七日、全線で運転を再開した。私は、利用者の一人として、全線運転再開のために尽力されたすべての方々に深く感謝する。そして、昭和九年の全線開通に比肩する慶事である今般の全線運転再開を心の底から祝うと共に、水害とコロナ禍で失われた賑わいが全線運転再開を契機に回復することを希う。（大子町大子在住）



常陸大子駅と機関庫

皇室の太子町来訪について

本誌前号に掲載された藤田貴則氏の寄稿「初めての皇室来大とレスリング」の中に、「太子町において歴史上初めてお迎えした皇室関係者は、昭和四十二年（一九六七）の三笠宮殿下・妃殿下である」との記述がありました。これに対して、町民の方から「昭和二十三年に、三笠宮殿下が西金にあった綿羊工場を視察のために訪れている。そのことを記念しての石碑も当地に現存している」というご指摘をいただきました。早速当時の新聞記事及び現地の石碑を調査したところ、このご指摘が正しいことを確認しました。編集する立場として、このような史実があったことを事前に確認できなかったことを読者の皆様にお詫び申し上げますとともに、先の記述を訂正したいと思います。

一方で、このような熱心に目を通していただける読者の皆様の支えがあるからこそ、「ほない歴史通信」は今日まで続けてこられたと改めて感じています。

ここで、昭和二十三年の三笠宮殿下の御来訪の模様について紹介させていただきます。

昭和二十三年十一月一日付「いはらき」新聞には、「奥久慈を御探訪 三笠宮殿下産業も御視察」という見出しの記事が掲載されています。そこには、諸富野村西野内の菊池五介氏方で江戸時代から続いている西野内和紙の視察後、下小川村西金のホームスパン工場を小室順太郎氏の案内で視察、同日は袋田泊、翌日は黒沢村に向き、紅葉の八溝山と林業を視察した後で矢祭山まで足を伸ばされている旨が記されています。

ホームスパン工場とは、町村合併前の下小川村第八代村長の小室順太郎氏が昭和二十一年に国際羊毛加工工場茨城羊毛株式会社として自宅前に工場を建設し、約四〇人の従業員で創業したもので

す。集荷した原毛を加工して洋服地用のホームスパンに仕上げるまでの一貫作業を行い、製品はアメリカ、イギリスまで輸出されるようになりました。私事ですが、父も復員後この工場にお世話になった話を、今は亡き父母から幼少期に聞かされたことを思い出します。本稿を書くにあたり、小室さんのご了解をいただくためお宅を訪問した際に、工場跡地にある松についてお話しいただきました。松は、三笠宮殿下が視察の記念として自らお植えされたもので、下にある石碑には昭和二十三年十月三十日の日付とともに、「三笠宮の松」の文字が彫られています。

全く偶然のことなのですが、本稿作成時に、三笠宮殿下御来訪よりさらにさかのぼる昭和十四年に皇族が来大した史実が新聞記事の調査から明らかになりました。現在、太子町歴史資料調査研究会では、既刊の『太子町関係「いはらき」新聞記事表題索引目録（二）』に続くものとして、昭和十三年から二十年までの索引目録作成作業を行っております。その作業の中で、朝香宮殿下が十四年十一月二十七日に袋田の滝を御覧になり、袋田温泉ホテルに宿泊された旨の記事を確認できたことを付け加えておきます。

今回、町民の方からのご指摘のおかげで新たな史実の掘り起こしができたことに改めて感謝申し上げます。（神長 敏）



三笠宮の松



西金駅前の小室順太郎翁胸像

産地づくりに向けた公的支援の展開（下の七）

―特産品・りんごのルーツを探る（一六）―

りんご栽培に不可欠な防除作業を行ううえで、「革命的」とも言われるスピードスプレーヤー（以下SSと略）の導入過程については本誌九六号まででみた。ここでは、SSを実際に稼働させる、あるいは支えた組合組織について若干補足しておきたい。

大子農協りんご部のなかに東部（生瀬）、西部（浅川、上岡、依上）、南部（西金）、北部（矢田、川山、下野宮、高田）という地区割が設けられていたことはすでに述べた。この地区割に重なる形で防除組合が組織され、それぞれ東部には第一防除組合、西部には第二防除組合、北部には第三防除組合、南部には第四防除組合ができた。SSの導入時に設立され、木澤源一郎さんが属した第二防除組合を例にとって、組合の活動の一端を明らかにしてみよう。

木澤さん所蔵の資料のなかに年次不明の組合員名簿がある。組合員は一九名、藤田金一組合長のもとに次の役職が設けられている。副組合長、事務局長、観察部長、機械部長、薬剤部長、オペレーター、監事である。このうち、観察部長は組合員の樹園地を巡視し、病害虫の発生状況を常時把握すること、必要があれば役員会での検討を経て特別散布を指示すること、機械部長はSSを保守管理し、使用後の整備等を行うこと、薬剤部長は農協から種々の農薬を調達して保管、管理し、散布時に渡すこと、オペレーターはSSを稼働して防除作業を行うこと、以上がそれぞれの任務であった。木澤さんは、薬剤部長に就いた。農薬事故を防ぐため昭和二十五年（一九五〇）に「毒物及び劇物取締法」が制定され、毒物劇物取扱責任者の資格をもった者でなければ農薬を取り扱うことはできない仕組みになっていた。鯉淵学園の学生時代にすでに当該資格を得ていた木澤さんがまさに適任であった。敷地の一

角に農薬倉庫を建て、前述のような任務をこなすことになるが、組合員一人一人の求めに応じて農薬を選び、農薬の使用法や希釈の仕方を教えながら渡すのは大変だったという。収量や品質に直結するので、間違えうわけにはいかない。気苦労の多いその仕事は、組合設立時から平成時代の初め頃まで継続した。こうした組合の存在があつてこそ、SSは病害虫防除に威力を発揮したのである。

さて本誌第八八号から、りんご栽培を育て、定着させるための大子町の支援策を検討してきた。振り返ってみると、一つは講師を外部から招いての講習会開催に伴う経費の支援であり、二つ目は、「りんご栽培の本命」と位置づけられた病害虫防除、それも背負噴霧器からSSに至る防除機器類購入への財政支援であった。これらに続く支援策の三つ目の柱が、薬剤購入への補助である。

昭和三十六年度の一〇万円に始まり、三十七年度一〇万円、三十八年度二〇万円、補助の事実は確認できるものの三十九、四十年の金額は不明、四十一年度二〇万円、四十二年度二五万円、四十三、四十四年度は各三〇万円と推移している。ちなみにそれ以後は、四十六年度、四十九年度は各三〇万円、五十年一五万円となつている。優良品質の確保、生産量拡大のために薬剤散布は不可欠な作業であるだけに、薬剤購入への支援は絶えることなく続けられていた。なお、四十三年度には、果樹共同選果機の導入に二〇万円の補助があつたことを付加しておく。

これらの大子町からの支援に加えて、とくに栽培技術の向上や経営改善に関する分野で果たした茨城県山間地帯特産指導所と大子地区農業改良普及所の役割についてもすでにみた（本誌八六、八七号参照）。専門家から「りんごは成功しない」と指摘されたり、温暖、多湿であるため気候的には必ずしも適地とは言えない大子町にあつて、不利な条件を克服しながらりんご栽培が徐々に根付いていく過程では先の三者による公的支援が大きな意味をもつたと言つても過言ではないだろう。

大子の今昔 写真帳

No.5

旧池田小学校

- 明治7年 池田小学校開校
明治8年 校舎新築
昭和57年 木造校舎解体工事
プレハブ校舎新築
平成13年 閉校
平成26年 プレハブ校舎解体
平成29年 跡地に池田保育園開所

閉校となって子どもの声が聞こえなくなった場所に新たに保育園が開所され、また子どもの声が聞こえるようになりました。
(大金真理子)



昭和30年
(池田小学校閉校記念誌「いけだ」より)



平成2年
(池田小学校閉校記念誌「いけだ」より)



現在(校舎解体後、池田保育園が開所されました)
※上の写真は、池田保育園建設中のもの

編集 大子町歴史資料調査研究会
編集人 齋藤 典生(大子町歴史資料調査研究員)
藤井 達也(大子町歴史資料調査研究員)
飯村 尚史(大子町教育委員会事務局)
神長 敏(大子町教育委員会事務局)
発行 大子町教育委員会
久慈郡大子町大字池田二六六九番地
大子町立中央公民館 ☎0295(72)1148
発行日 令和三年(二〇二二)六月一日